
共感的な親近感

氷純

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

共感的な親近感

【Zコード】

Z9755U

【作者名】

氷純

【あらすじ】

友情か愛情か、男女の別も、その判別は読者の方に委ねます。

カウンターの隣の席で友達がまた男に降られたと愚痴つている。酒の力で上乗せして、ギャー・ギャーとそれはかつての子供の頃のように彼女を降つた男を罵倒する。

「ちょっと、聞いてんの？」

「聞いてるよ」

実際は上の空。度々の事だから、何を言つていたかの見当はつく。「君の気持ちが分からぬつて分かる訳ないじゃん。分かりたかったら神様にでもなれつての！」

彼女の怒鳴り声に後ろの男性客が迷惑そうに振り向いた。私と目が合うと同情するような視線を向けて肩をすくめた。

醉つ払いに絡まれた一般客と思われたらしい。

それ程までに釣り合わないかと軽く落ち込む。

「大体、人と人の間には絶対的な壁があるんですよ！」
彼女は飲み干したグラスを置いてから、荒々しくカウンターを叩いた。

グラスを持ったまま叩きつけない所を見るに熱が引いてきたのだが。「悲嘆する前に手でも繋げば？」

そろそろ頃合いと見て笑い話に昇華させるべく、混ぜつ返す。

「乙女だねえ」

彼女はあの頃と同じどこか大人びた風にクスクス笑つた。

この顔を見逃した男に少しの優越感、少しの憐憫、それにこれは——

「——どうかした？」

彼女が黙つた私へ笑顔を向ける。

「いや、この笑顔を見逃した男は損してるなつて」

「そうだよ。いつか後悔させてやんだから！」

彼女はそう言って拳を天井に突き上げる。

「させてやれ、させてやれ！」

その男が後悔すればこの親近感は増してしまってどうだろ。……。
それを知る私は未来の自分に対して無責任に拳を掲げた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9755u/>

共感的な親近感

2011年7月18日02時36分発行